

「共に豊かに生きる力」を育む交流及び共同学習についての一考察

A Study on Fostering the Ability to Live Richly Together through Interaction and Collaborative Learning

八 嶋 孝 幸*

Takayuki YASHIMA

要旨

本研究は、交流学習、共同学習それぞれの目標を明確にし、二つの側面を生かすことによって学習の充実を図り、「共に豊かに生きる力」を高めることができるかについて検証することを目的とする。

交流及び共同学習を充実させるための三つのポイントを設定し、それを基に計画を立案して実践した。結果、交流及び共同学習では、比較的交流の側面が強くなるのは否めないが、相手意識をもった活動にすることで、主体的に学習に取り組む態度の向上や既習の知識・技能を深めることに繋がり、共同学習の側面も充実し、学びが深まるという様子が見られた。

カリキュラムを作成する上で、どのような教科の学びを深めることに適しているかなど、交流及び共同学習を行うことによって、より教育効果が得られる場面を明確にし、カリキュラム全体を見渡しながら効果的に取り入れていくことが今後の課題である。

キーワード：交流及び共同学習、資質・能力、相互理解、カリキュラム・デザイン

1 はじめに

現行の小・中学校等や特別支援学校の学習指導要領等においては、交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすることと明示されている¹⁾。特別支援学校の児童が、小学校の障害のない児童と触れ合い、共に活動する交流及び共同学習は、特別支援学校の児童にとって、普段得られない経験を深め、豊かに生きるための社会性や人間性を養うための貴重な機会になる。もちろんそれは、障害のない児童にとっても同様に貴重な機会となる。つまり、これからの社会において同じ社会で生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、学びを生かしながら支え合って豊かに生きていくための基盤となる資質・能力を育むために重要な学習と言える。またこの学習は、我が国の目指す、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現のためにも重要である。

この交流及び共同学習を学校の教育活動として実施していく際には、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面の二つの側面を分かちがたいものとしてとらえ、推進していくことが肝要であるとされている²⁾。また、単発の交流やその場限りの活動にならないように注意する必要があるという指摘もある³⁾。本校においてこれまで実施されてきた交流活動についても、その場限りの活動になりがちだったという実態があった。

本研究は、交流学習、共同学習それぞれの目標を明確にし、二つの側面を生かすことによって学習の充実を図り、同じ社会で生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、学びを生かしながら支え合って豊かに生きていくための基盤となる資質・能力を高めることができるかについて検証することを目的とする。尚、本研究においては、同じ社会で生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、学びを生かしながら支え合って豊かに生きていくための基盤となる資質・能力を「共に豊かに生きる力」と設定する。

* 弘前大学教育学部附属小学校 Elementary School Attached of Faculty of Education, Hirosaki University

2 研究方法

2.1 活動計画の立案にあたって

国立特別支援教育総合研究所『地域実践研究 交流及び共同学習の充実に関する研究（令和元年～令和2年度）』では、交流及び共同学習を充実させるために必要な観点を次の2点に整理している⁴⁾。

- ①今持っている力の発揮, 「今ここ」の充実, 児童生徒の暮らし
- ②役立つこと, 喜ばれること

上記を参考に、小学校と特別支援学校の交流担当者で協議の上、交流及び共同学習を充実させるための三つのポイントを設定し、実践の計画を立案した。設定したポイントは下記である。

- a) 新たに力を身に付けることをねらうのではなく、児童生徒が今持っている力を十分発揮できるような目標を設定する。
- b) 児童生徒の日常の「暮らし」の要素を持ち込み、学びが生活文脈の中で必然性を持って生かされるようにする。
- c) これまでの学びが新たな文脈の中で生かされることで、役立つ・喜ばれる経験や実感が得られる内容にする。

2.2 検証の方法について

検証の方法としては、次の2点を行った。

- ①授業プロセスの記録を基にした分析。
- ②振り返りシートの記述を基にした分析。

①については、主に図画工作科や特別活動における既習を生かして、学びがより深まったかについて検証するため。②については、主に交流後に相互理解が進んだかについて検証するために実施した。

分析は小学校と特別支援学校の担当者が記録を基に協働で行い、成果や課題についてまとめるという手法をとった。

3 活動計画

活動は、以下のように全4回実施した。

- ①「みんなで造形遊び」令和4年7月…小学校で実施
- ②「なかよしタイム校内オリエンテーリング+共同製作」令和4年10月…特別支援学校で実施
- ③「交流クリスマス会」令和4年12月…小学校で実施
- ④「作品展」（共同作品で参加）令和5年1月…ギャラリーを借りて作品を展示

4 活動の実際

4.1 活動①「みんなで造形遊び」について

4.1.1 活動の目標

①交流の側面

本活動は、小学校と特別支援学校の児童が造形遊びを通して交流し、相互理解を深めるということ目標とする。

②共同学習の側面

本活動は、図画工作科の授業として実施した。これまで図画工作の学習で身に付けた、資質・能力を発揮して、新たな人間関係においても、それぞれの考えのよさや面白さを生かすよう協働しながら、形や色を工夫して表すことを通して、学びを深めることを目標とする。

4.1.2 指導観・教材観

本題材を実施するにあたって、障害のある児童にとって、扱いやすい材料について検討し、双方の児童が、造形活動に集中して取り組めることを意図して題材開発をした。主材料は、容易に分解してつなぐことがで

きるカラーフラフープ（ピンク、黄色、青、緑、各50セット）を使用した。ずらして長く繋げたり、ぐねぐね曲げて繋げたりなどしながらいろいろな形や色を楽しめる材料である。造形遊びとしては、周囲の仲間や場所と関わりながら、形や色のよさや面白さを生かして表すことができることを図った。相互理解を意図した交流や共同学習を充実させるため、育成したい資質・能力を基に、鑑賞する視点を明確にしながら、互いの発想や構想、表し方のよさや面白さを価値付けし、活動中に話し合ったことを振り返ったり、自分の活動に生かしたりできるようにする。

4.1.3 活動プロセスの記録

本題材の導入では、まず主材料のカラーフラフープに時間をかけて慣れ親しめるようにした。その後、材料に慣れ親しむ中で気付いたことについて共有し、それを基にどんな形や色を工夫した活動ができるかを考え、思い付いたことをどんどん行うように伝えた。活動場所は、本校のパティオ（中庭）で実施した。場所はコンクリートで覆われていて、転倒すると危険であるため、安全のための注意として走らず移動するように確認した。本活動は、あえてお互いの自己紹介もしないまま活動に入ったため、最初は、小学校の児童と特別支援学校の児童の双方が緊張した面持ちであったが、材料や場所を共有し、時に意見を交換しながら活動することを通して、自然にお互いに楽しそうに交流しながら活動するようになった（図1）。小学校の児童は、ある程度造形遊びの経験を積んできているので、既習を生かして、材料や場所の感じを適切に感じ取り、材料の繋ぎ方を工夫して面白い形になるように広げていったり、色の選び方や置き方等を工夫したりしながら思い思いに製作をし、活動をリードしている様子が見られた。特別支援学校の児童は、最初はどのように活動するか見通しがわからない児童も見られたが、小学校の児童の活動の様子を見たり、声をかけられたりしながら共に活動することを通して、徐々にイメージがふくらみ、楽しそうにつくり、つくりかえをしていく様子が見られるようになっていった。特別支援学校の児童の様子の中から、小学校の児童が造形的な面白さや工夫のよさを感じ取る場面もあり、お互いの表現のよさや面白さに刺激し合いながらよりよくするために工夫して活動するような様子が見られた。活動の終末の振り返りの時間においては、小学校の児童と特別支援学校の児童の双方から、「一緒にできて楽しかった」「もっと交流したかった」「一緒に考えたらすごいものができた」という内容の感想が出された。

活動後に10分程度、自由に遊ぶ時間を設定した。その時間においては、小学校の児童と特別支援学校の児童が特に促さなくても一緒に遊んでいる様子が見られた（図2）。活動を通して、互いの仲間意識が高まったのからこそ見られる姿ではないかと考える。



図1 造形遊びを通して交流



図2 自然と集まって遊ぶ様子

4.2 活動②「なかよしタイム校内オリエンテーリング+共同製作」について

4.2.1 活動の目標

①交流の側面

本活動は、特別支援学校を会場とした校内オリエンテーリングと共同製作である。校内オリエンテーリン

グは支援学校の児童が活動をリードして、自分たちの学校を案内しながら、数カ所のチェックポイントにある課題を協力して解決していく活動である。共同製作は、小学校の児童がリードして、共同で工作をつくる活動である。協力しながら活動を行うことを通して、相互理解を深めることを目標とする。

②共同学習の側面

本活動は、図画工作科と特別活動の教科等横断的な学習として実施し、特別支援学校の児童は更に、自立活動としても実施した。主に校内オリエンテーリング部分は特別活動として、共同製作部分は図画工作科として実施した。オリエンテーリングは学級活動（1）における話し合い活動を通して決定した活動内容を、工夫して具現化する活動として、共同製作は工作の内容として実施し、これまでの既習を生かせる活動として計画した。自立活動としては、「人間関係の形成」「コミュニケーション」を重視して計画している。

4.2.2 指導観・教材観

本活動の校内オリエンテーリング部分については、これまで交流学习において受け身になりやすかったという特別支援学校側の意見を受けて、特別支援学校の児童がリードできる活動として考案した。活動をリードすることを通して、その取り組み方のよさを認められる機会を増やしたいという願いを込めて設定された活動である。共同製作は地元の伝統的祭りであるねぶたの技法を使用した工作である。四つ葉型の骨組みを小学校で製作し、その骨組みに、事前にねぶた団体から譲り受けたねぶたの紙（実際にねぶた祭りで使用されたもの）を切って貼り付け、「友情の四つ葉ねぶた」をつくる活動である。骨組みは、扱いやすいアルミ針金で作成し、貼るための用具に木工用ボンドやハサミなどの使い慣れたものを使用することで、既習を生かせるように配慮している。

4.2.3 活動プロセスの記録

本活動は、前述通り特別支援学校で実施した。最初に、体育館に集合し、活動の概要やグループ分けについて説明した後に、グループ毎にチェックポイントに移動し課題に取り組んだ（図3、4）。本活動のチェックポイントは以下のように五つ設定した。

- ① みんなでポーズ（四人が役割分担し、指定されたポーズを遊具の上で行う。）
- ② みんなで缶積み（協力して、8個のアルミ缶を縦に積む。）
- ③ みんなでクイズ（特別支援学校に関するクイズを相談しながら解く。）
- ④ みんなでカウント（3階から1階までの階段の数を一緒に移動しながら数える。）
- ⑤ みんなでドレミ（協力してハンドベルをドレミファソラシドの順に鳴らす。）



図3 みんなでポーズの様子



図4 みんなで缶積みの様子

これらのチェックポイントをクリアしていくと、一つのチェックポイント毎にシールが渡され、事前に渡した用紙に貼っていくと、「友情のあかし」と名付けたハートマークが完成するというようにした。(図5)オリエンテーリングが始まると、特別支援学校の児童が活動をリードし、各チェックポイントに連れていったり、学校の色々な施設の説明をしたりしていた。小学校の児童は特別支援学校の児童が活動をリードしようとするのを支えながら、楽しそうに活動していた。特別支援学校の児童は、自分たちの学校であるという安心感もあり、自信を持って活動をリードすることを通して、自分が役立っていると感じたのか満足げな表情を浮かべている様子が見られた。全てのグループが「友情のあかし」を完成させた後、体育館に戻り共同製作を行った。今度は小学校の児童が活動をリードして、難しいところは一緒にやるなどしながら、「友情の四つ葉ねぶた」を完成させた(図6)。大きなねぶた絵の中からお気に入りの部分を切り取って骨組みに貼るという活動の中で、小学校の児童は特別支援学校の児童が好んで選んだ部分に興味・関心を寄せ、自分とは違う形や色の多様な感じ方について理解を深めている様子が見られた。完成後、四つ葉ねぶたを暗闇の中で照らして鑑賞した際には、大きな歓声を上げて喜ぶ様子が見られた。



図5 友情のあかし



図6 四つ葉ねぶた製作の様子

4.3 活動③「交流クリスマス会」について

4.3.1 活動の目標

①交流の側面

本活動は、それぞれの学校の児童が、相手と楽しむための企画を考え共に楽しむことを通して、相互理解を深めることを目的とする。

②共同学習の側面

本活動も前回同様、図画工作科と特別活動の教科等横断的な学習として実施し、特別支援学校の児童は更に、自立活動(「人間関係の形成」「コミュニケーション」)を重視)としても実施した。主に交流の中身を考える活動と交流自体は特別活動として、その他、関連する製作は図画工作科として実施した。共に、これまでの既習を生かせる内容として計画した。

4.3.2 指導観・教材観

本活動の内容については、小学校、特別支援学校の児童それぞれが相手意識をもって積極的に働きかけることをテーマに設定した。それぞれの学校で相手がどんなことだったら喜ぶかを学級活動の中で話し合い、内容を決めていった。それとは別に、共同製作として友情のクリスマスツリーづくりを提案した。クリスマスオーナメントを図画工作科の時間に製作して持ち寄り、共に飾ってライトアップしたクリスマスツリーを鑑賞するという活動である。生活の中にある感動を活動に持ち込み、交流及び共同学習の効果を高めることを意図している。

4.3.3 活動プロセスの記録

本活動は、小学校の多目的室で実施した。最初に、活動の流れについて説明した後、それぞれの学校の児

童が準備したゲームを行った。運営についてもそれぞれの学校の児童が担当した。相手に楽しんでもらうためにはどうすればいいかを合意形成して準備したゲームを体験してもらう中で、相手に喜んでもらったことを喜んで見られた様子が見られた(図7, 8)。

活動の最後には、図画工作科の時間に製作したオリジナルのクリスマスオーナメントをクリスマスツリーに飾り、ライトアップした(図9, 10)。オーナメントづくりには、これまで図工で使用した経験のある多様な材料を使用しており、それらの特徴を生かしながら工夫してつくられた物ばかりであった。友情のクリスマスツリーと名付けられたそのツリーを眺めて、涙ぐんでいる様子の児童も見られた。

準備段階において、小学校の児童は、例年行っている学級でのクリスマス会はやらなくていいので、この活動を重視して行いたいと主張して準備をしてきた。そのエピソードからも、子どもたちがこの学習を大切に思っていたことが理解できた。



図7 特別支援学校児童が用意したゲーム



図8 小学校児童が用意したゲーム



図9 オーナメントを飾る様子



図10 完成したクリスマスツリー

4.4 活動④「作品展」

特別支援学校が自校の教育活動について広く紹介するために例年行っている作品展に、交流及び共同学習で製作した「友情の四つ葉ねふた」も展示した(図11)。テレビや新聞等のメディアにも本交流及び共同学習が取り上げられ、活動に参加していた小学校児童の保護者も児童と共に多数鑑賞に訪れていた。鑑賞に訪れていた児童は、自分の製作した作品を誇らしげに保護者に紹介する様子が見られた。鑑賞後のアンケート

では、「(交流及び共同学習が) とても意義のある活動である」「子どもたちの生き生きとした交流の様子が伝わってきた」などの意見が寄せられた。

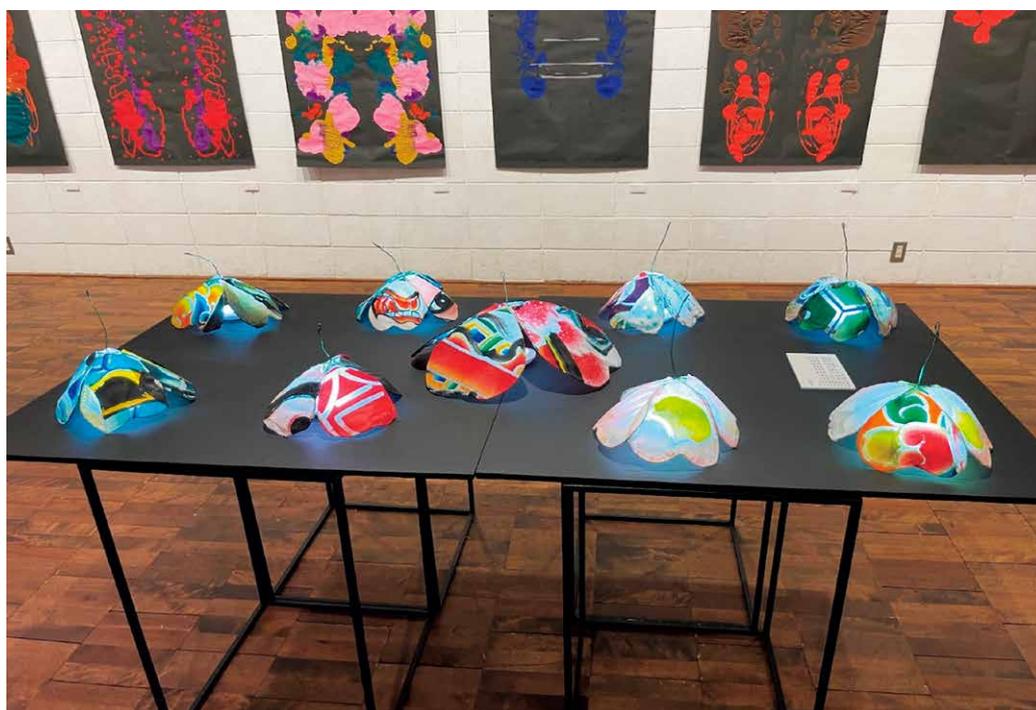


図11 展示の様子

5 検証

検証としては、それぞれの活動におけるプロセスの記録や質問紙の分析を、小学校と特別支援学校の教員が協働で行った。プロセスの記録の分析については、映像や写真による児童の姿を基に活動を振り返り、教員が心に残った各場面での児童の様子から、学びが深まったかについて協議した。

交流学習の側面では、お互いに楽しいと思える活動を設定し、共に楽しみながら同じ目標に向かって取り組むことを通して、相互理解が深まるのではないかという意見が多く出された。共同学習の側面では、特に相手のことを考えて役に立とうとする場面において、これまでの学習で身に付けたことを積極的に生かそうとする様子が見られた。その様子から、互いに助け合ったり、相手を喜ばせたりしようとする必要感をもって既習を生かすことになり、学びが深まることに繋がったのではないかという意見が多く出された。

質問紙の分析については、活動の満足度と活動への主体性を数値化（5段階）したものの変容と記述内容のテキストマイニング（図12）を基に協議した。活動の満足度の数値は、1回目4.4から3回目4.9に上昇。活動への主体性の数値は、1回目3.1から3回目4.8へ上昇した。テキストマイニングの分析では、やさしいや楽しい等、お互いのよさを認める言葉や相手のことを思った行動ができたという言葉が多く出されたという結果になった。

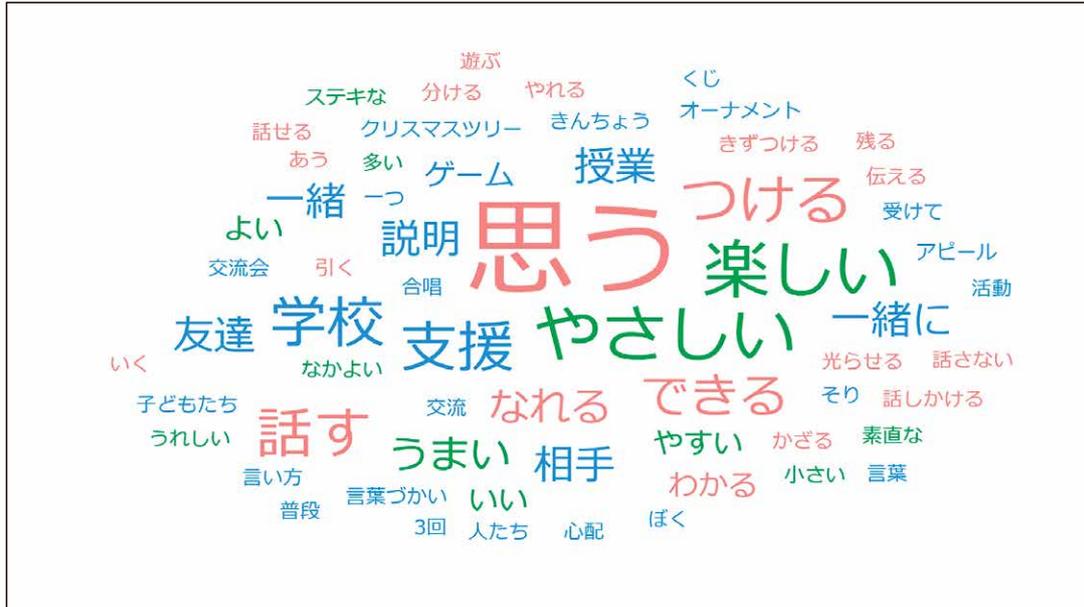


図12 テキストマイニングの結果

6 成果と課題

6.1 成果

両校における協議を基にした検証の結果を整理すると以下のようになった。

小学校

- 当初に比べて障害への理解が深まった。
- 障害のある児童への仲間意識が強まった。
- 図画工作や特別活動の既習を生かして、活動の中に応用することで、学びが深まった。

特別支援学校

- 小学校の児童に対して自ら働きかける様子が増えた。
- 自分が役に立てるという実感を得た。
- 図画工作科等で取り組む内容を理解し、積極的に取り組むことができた。

これらの結果から、本研究は交流の側面と共同学習の側面を共に充実することに繋がり、「共に豊かに生きる力」を育むことに繋がったと考える。交流及び共同学習では、比較的交流の側面が強くなるのは否めないが、交流のよさを生かして相手意識をもった活動にすることで、主体的に学習に取り組む態度の向上や既習の知識・技能を深めることに繋がり、共同学習の側面も充実するという様子が見られた。つまり、実施することで共同学習の側面（教科の学び）と交流の側面の両方が同じくらいに充実するというイメージではなく、比較的交流を重視する形にはなるが、交流を通して得た人間関係を基にして自分なりの課題をもち、自分事の活動として取り組むことを通して、二つの側面の充実が得られ、学びが深まったと言えよう。

6.2 課題

取り組んだ活動については概ね成果があったと考えるが、カリキュラムを作成する上で、どのような教科の学びを深めることに適しているかなど、交流及び共同学習を行うことによって、より教育効果が得られる場面を明確にし、カリキュラム全体を見渡しながらか効果的に取り入れていくことについては、工夫して取り組む余地がある。どのような資質・能力を育むかをより明確にし、活動を継続しながらよりよい活動にしていくことが今後の課題である。

7 終わりに

交流学习、共同学習それぞれの目標を明確にし、二つの側面を生かすことによって学習の充実を図り、「共

に豊かに生きる力」の向上が見られたのは、本研究の一つの成果である。しかし、どのような教科の学びを取り入れ、充実させることができるかについては課題が残った。子供たちがこれからの社会の中で、交流及び共同学習で育まれた「共に豊かに生きる力」を発揮して未来を切り拓く姿をイメージしながら、今後も、資質・能力の向上に向けた交流及び共同学習の充実について模索していきたい。

謝辞

本研究は令和4年度弘前大学教育学部附属学校共同研究奨励費の助成を受けたものである。

研究にあたり、様々なご協力をいただいた弘前大学教育学部附属特別支援学校の鳴海愛子先生、加賀谷紀先生をはじめ諸先生方、交流学級の担任である本校の工藤麻乃先生、弘前大学教育学部美術教育講座に於いてご指導ご助言くださった佐藤絵里子先生をはじめ諸先生方に感謝申し上げます。

註

- 1) 文部科学省、『交流及び共同学習ガイド』, 2019, pp.1-3
- 2) 文部科学省, 同書, p.2
- 3) 文部科学省, 同書, p.3
- 4) 国立特別支援教育総合研究所, 『地域実践研究 交流及び共同学習の充実に関する研究 (令和元年～令和2年度)』, 2021, pp.162-163